千葉県文化財センター調査報告第282集

成田市松崎遠原遺跡

—千葉県立成田園芸高等学校情報科学科棟埋蔵文化財調査報告書—

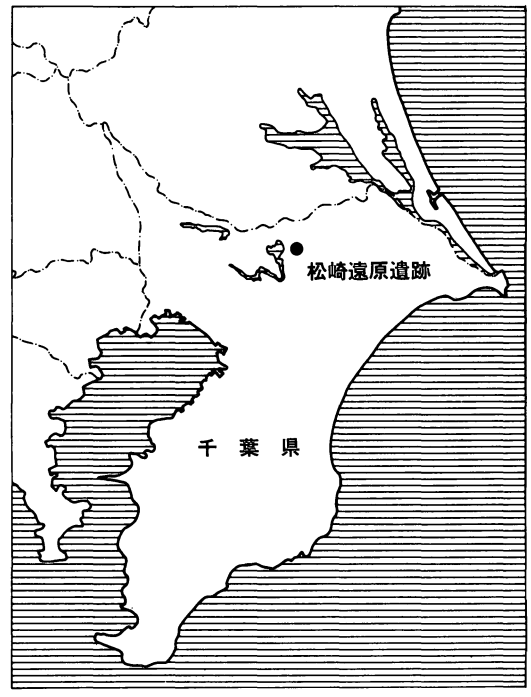
平成８年１月

千　葉　県　教　育　委　員　会

財団法人　千葉県文化財センター

成田市松崎遠原遺跡

—千葉県立成田園芸高等学校情報科学科棟埋蔵文化財調査報告書—



序　　文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第282集として、千葉県立成田園芸高等学校情報科学科棟建設に伴って実施した成田市松崎遠原遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、埴輪が出土したほか、奈良時代の竪穴住居跡や溝状道路跡が検出されるなど、この地域の古墳時代や奈良時代の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また、郷土の歴史に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成８年１月31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長　中　村　好　成

凡　例

1　本書は、千葉県教育庁管理部施設課による千葉県立成田園芸高等学校情報科学科棟建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は、千葉県成田市松崎字遠原3-31ほかに所在する松崎遠原遺跡(遺跡コード211－060）である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県教育委員会の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。

4　発掘調査及び整理作業は、調査研究部長西山太郎、成田調査事務所長石田廣美の指導のもと、主任技師井上哲朗が下記の期間に実施した。

　　発掘調査　平成７年６月１日～６月30日

　　整理作業　平成７年７月１日～７月31日

5　本書の執筆は、主任技師井上哲朗が行った。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、同管理部施設課、千葉県立成田園芸高等学校の御指導、御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

　　第１図　国土地理院発行　1/25,000地形図「成田」(N1-54-19-10-3)

　　第２図　成田市役所発行　1/2,500都市計画図「成田市　24」

8　周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による平成２年撮影のものを使用した。

9　本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

10　本書で呼称した遺構番号は、編集の都合上、調査時の番号と異なる。

11　挿図に使用したスクリーントーン及び記号の用例は、次のとおりである。

	カマド袖部(砂質粘土)	•	土師器
	カマド火床部	▪	須恵器
	硬化面	∘	土製品、石製品
	攪　乱	⋆	金属製品

本文目次

Ⅰ　はじめに…… 1
Ⅱ　検出遺構…… 3
Ⅲ　出土遺物…… 8
Ⅳ　まとめ……11
報告書抄録……巻末

挿図目次

第１図　遺跡の位置と周辺遺跡…… 1
第２図　遺跡周辺の地形…… 2
第３図　調査区全体図…… 3
第４図　ＳＫ01、ＳＩ01、ＳＩ02…… 4
第５図　ＳＩ03…… 5
第６図　ＳＤ01、ＳＫ02・03、Ｐ01～Ｐ08…… 6
第７図　ＳＤ01遺物出土状況…… 7
第８図　古墳時代以前の遺物…… 8
第９図　奈良時代以降の遺物…… 9

表目次

第１表　成田安食線関連遺跡概要…… 2
第２表　奈良時代土器観察表……10

図版目次

図版１　(1)航空写真　(2)Ｂ区全景
図版２　(1)Ａ区トレンチ　(2)ＳＫ01
(3)ＳＩ01全景
図版３　ＳＩ02　(1)全景　(2)遺物出土状況
(3)カマド半截状況　(4)カマド掘方
図版４　ＳＩ03　(1)全景　(2)遺物出土状況
(3)カマド半截状況　(4)カマド掘方
図版５　(1)ＳＤ01全景　(2)ＳＫ02・03、Ｐ01～Ｐ04
(3)ＳＤ01、ＳＫ04、Ｐ06～Ｐ08
図版６　出土遺物

Ⅰ はじめに

1．調査の経緯

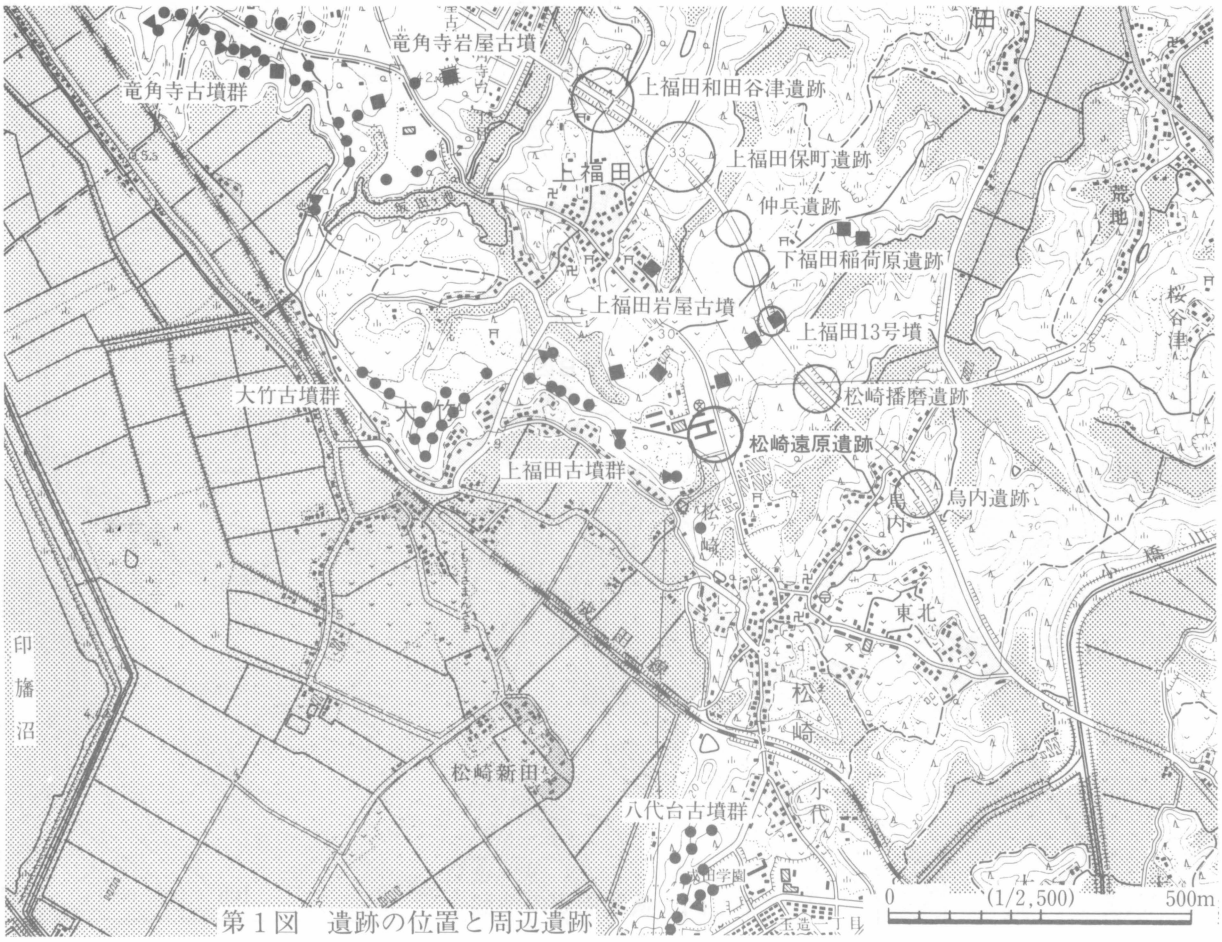
千葉県立成田園芸高等学校では、平成８年度に情報科学科の設置が予定され、それに伴い千葉県教育庁管理部施設課によって敷地内に新校舎（情報科学科棟）の建設が計画された。建設予定地が周知の遺跡内にあることから、千葉県教育委員会は記録保存の措置をとることとし、平成７年６月から財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施した。

2．遺跡の位置と環境

松崎遠原遺跡は成田市北西部、印旛郡栄町との境界近くに位置する標高30mほどの台地上に立地する。西側には印旛沼及び沖積地が広がり、北側から東側は利根川へ流入する根木名川及びその支流が形成した樹枝状の谷津が入り込む。

本遺跡の約300m東側を通る県道成田安食線の建設に際して、昭和61年度から平成２年度にかけて数か所の遺跡の発掘調査が実施された。以下、この成果を中心に、本遺跡で検出された縄文時代、古墳時代後期、奈良・平安時代、中世について当地域の歴史的環境を概略することとしたい。

縄文時代の遺物は全遺跡から出土している。草創期は上福田和田谷津遺跡、早期は松崎播磨遺跡、後期は下福田稲荷原遺跡、松崎播磨遺跡の加曽利Ｂ式が顕著である。竪穴住居跡は下福田稲荷原遺跡で５軒、烏内遺跡で８軒が検出されている。



第１図　遺跡の位置と周辺遺跡

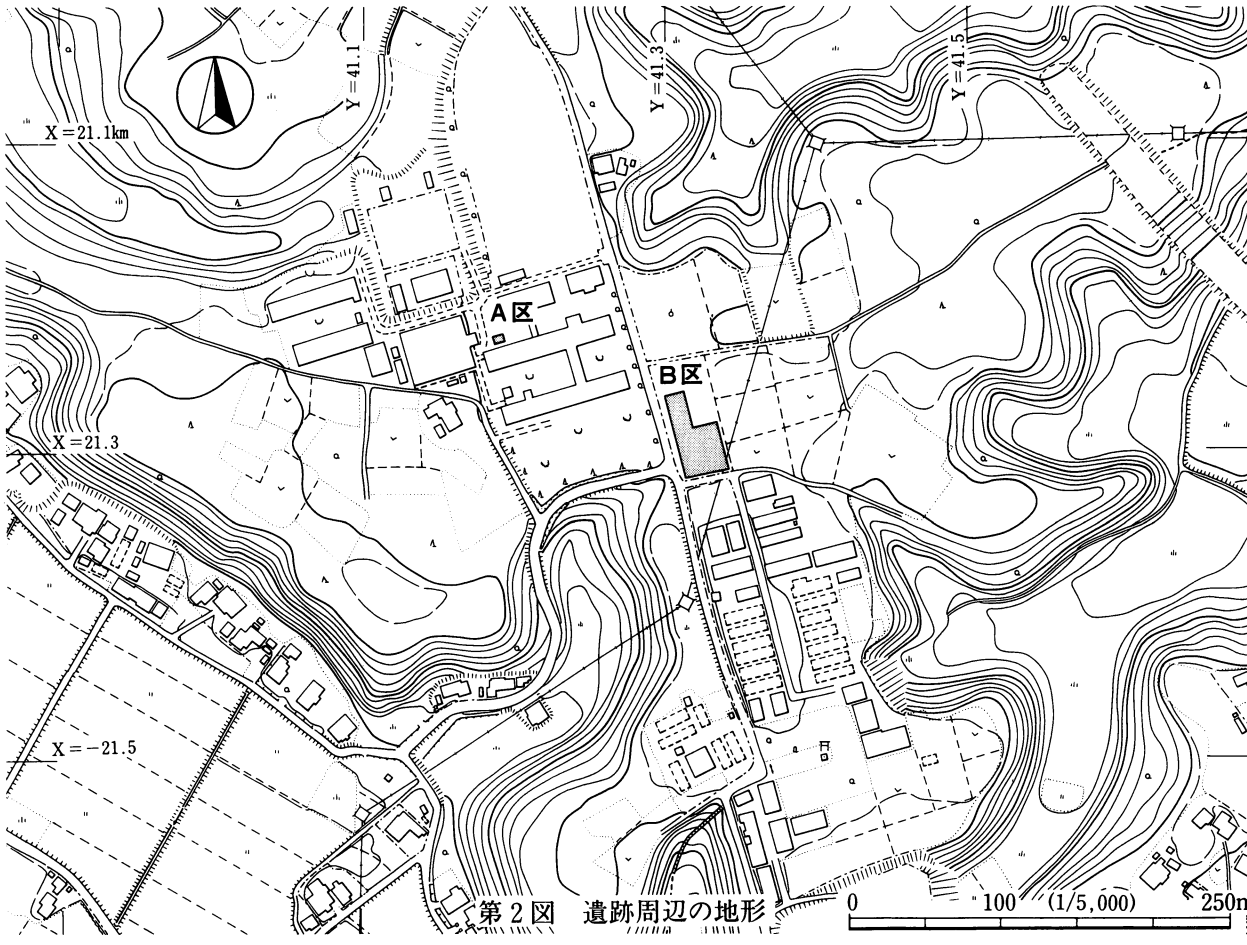
古墳時代後期には印旛沼を望む台地縁辺部に多数の古墳が築造された。本遺跡の北西約２kmには県内最大規模の龍角寺古墳群、西側約１kmには大竹古墳群、西側に隣接して上福田古墳群などが存在する。また、北西約３kmには７世紀後半の創建と推定される龍角寺が、北西約2.5km地点には埴生郡衙推定地がある。古代松崎地域は印旛郡玉作郷の一部に比定され、７世紀から８世紀にかけては畿内勢力と密接に関係したと考えられている。成田安食線関係遺跡では、上福田和田谷津遺跡、仲兵遺跡、松崎播磨遺跡、烏内遺跡で８世紀の竪穴住居跡が検出されている。

中世には埴生庄松崎郷、福田郷地域と考えられ、各遺跡で溝や土坑群が検出されている。松崎播磨遺跡の台地整形区画及び内部の土坑群は、中世集落が近在したことを推測させるものである。

時代 / 遺跡	縄文時代					古墳時代後期～平安時代	中世
	草創期	早期	前期	中期	後期		
上福田和田谷津遺跡	◎			△	◎	竪穴住居跡 2（7C前、7C後～8C初）	溝
						掘立柱建物跡 2	
上福田保町遺跡		△	△		◎	竪穴住居跡 1（7C前～中）	溝・土坑群・ピット群
仲兵遺跡		○	△	○	◎	竪穴住居跡 1（8C代）	
下福田稲荷原遺跡	△	△	△	△	◎	祭祀遺構 1	溝・土坑群
上福田13号墳		△	○	△	○	方墳 1（7C後）	
松崎播磨遺跡		◎	◎	△	◎	竪穴住居跡16（7C中～9C初）	
烏内遺跡					◎	竪穴住居跡27（7C～9C末）	溝・台地整形区画・地下式坑

第１表　成田安食線関連遺跡概要（△：縄文土器１～９点、○：10～19点、◎：20点以上）

（財団法人千葉県文化財センター『主要地方道成田安食線地方道道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書II』1993年　から作成）



第２図　遺跡周辺の地形

II 検 出 遺 構

本遺跡の調査は、校舎側のＡ区（45㎡）と道路を挟んだ農場内のＢ区（999㎡）部分に分かれる。

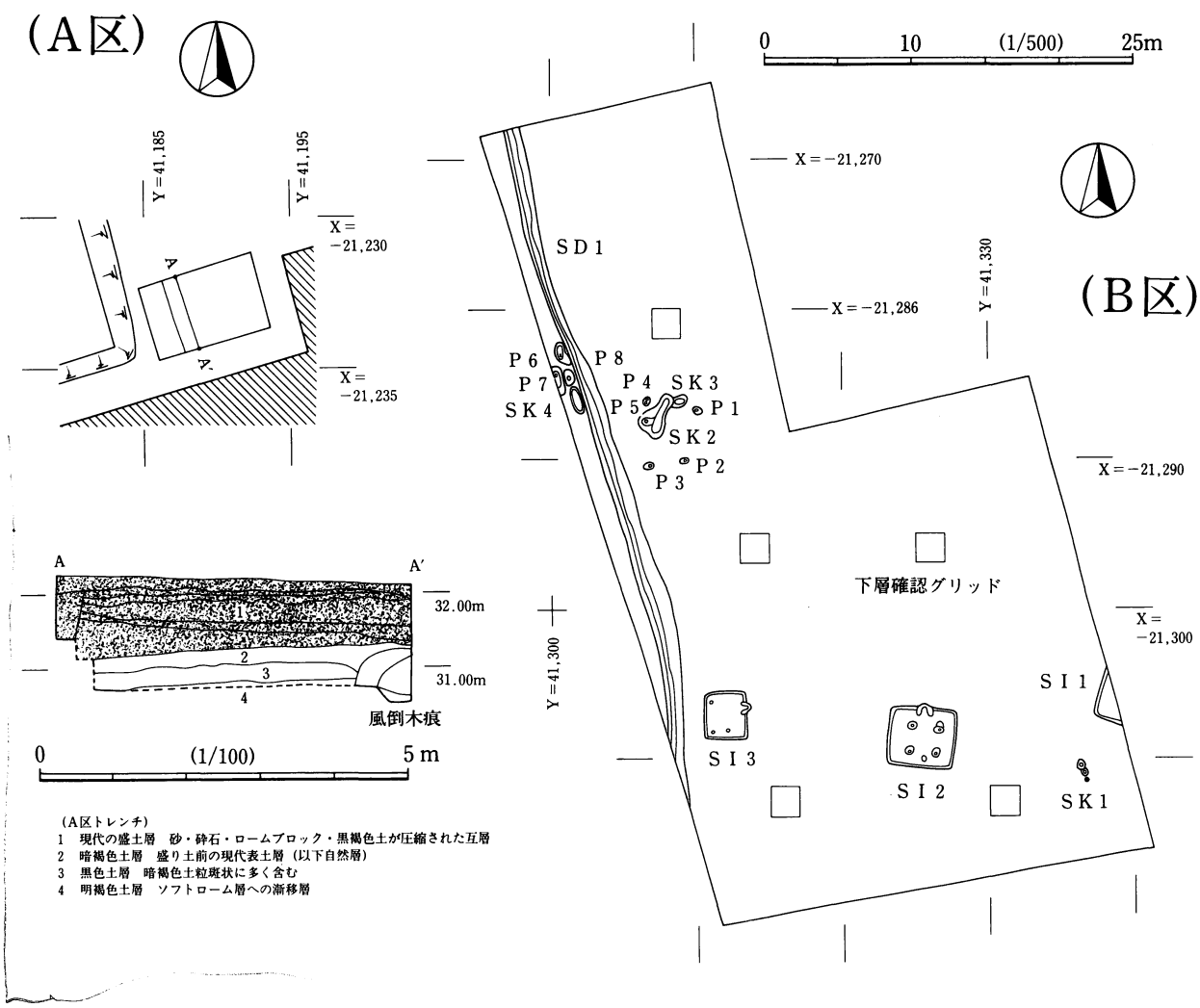
遺構はＢ区のみで検出された。トレンチャーによる攪乱が激しいが、縄文時代炉跡１基、奈良時代竪穴住居跡３軒、奈良時代溝状道路跡１条、中世柱穴跡８基、中世土坑４基が確認された。このうち、縄文時代炉跡については明確な時期は確定できない。竪穴住居跡及び溝状道路跡については、覆土内遺物から８世紀初頭と判断した。また、中世遺構については、その形状から柱穴跡と土坑に区別し、形状及び出土遺物から中世（15世紀代）と判断した。

なお、調査時に付けた遺構番号は、本書では一部以下の様に変更した。

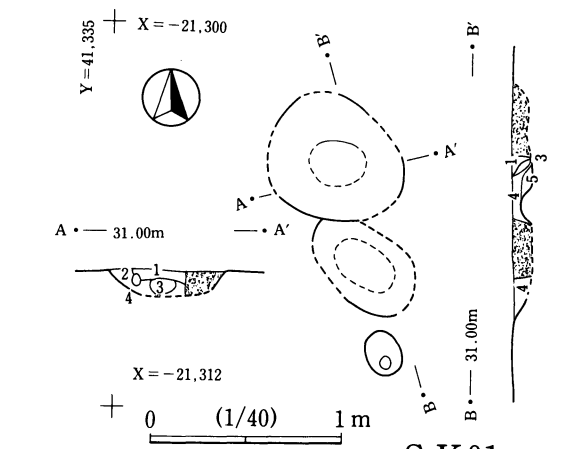
ＳＫ02→ＳＫ02・03・Ｐ05、ＳＫ03→ＳＫ04、ＳＫ04→Ｐ07・08、ＳＫ05→Ｐ06

Ａ区（第３図、図版２）

まず、調査範囲45㎡の中にほぼ南北に長いトレンチ（１ｍ×５ｍ）を設定し、土層を確認した後、残りの部分を掘り下げた。地表から１ｍほどまでは砂、砕石、ロームブロック、黒褐色土などが堅く圧縮された層が重なっており、明らかに近年の盛土であることが確認された。それより下は盛土以前の現代表土層、

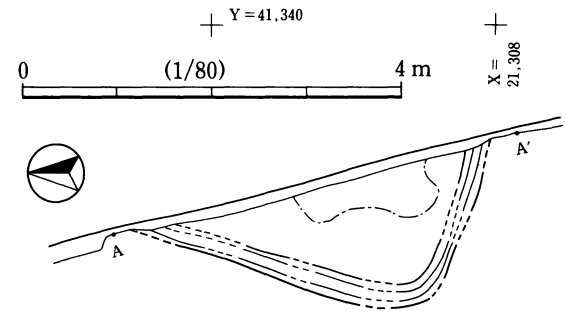


第３図　調査区全体図



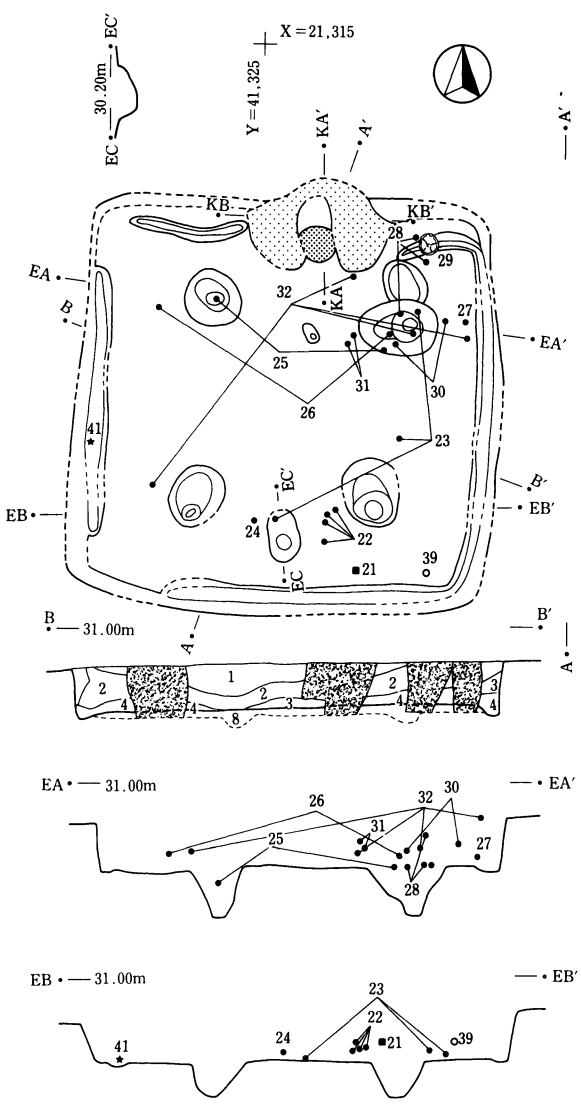
S K01

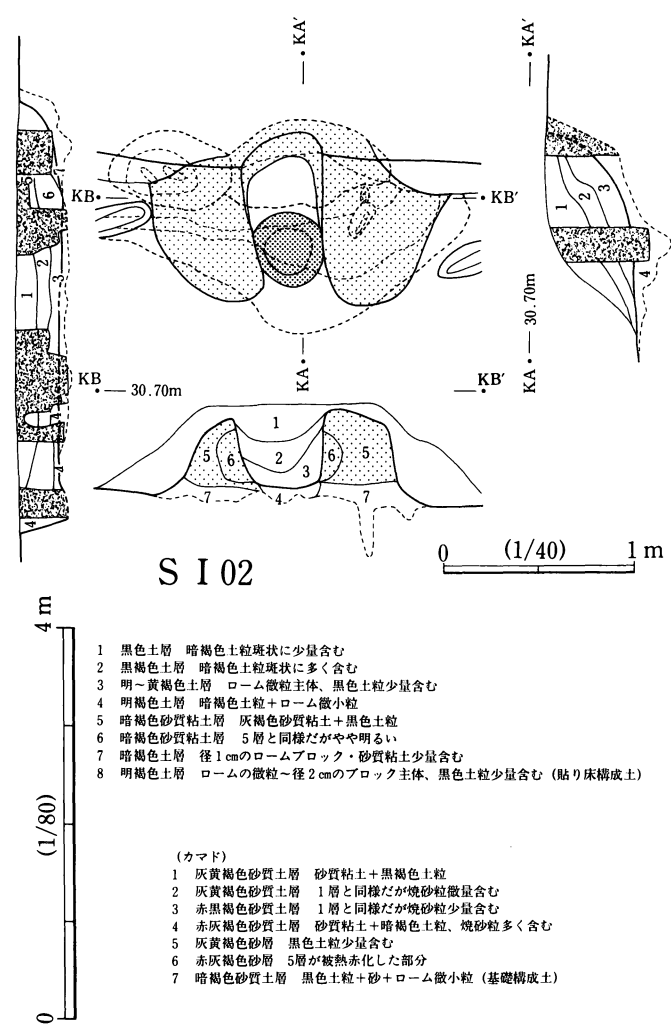
(S K01)
1 赤暗褐色焼土層　焼土粒＋黒褐色土粒、炭化物粒微量含む
2 焼土ブロック
3 ハードロームの被熱赤化ブロック
4 赤暗褐色焼土層　焼土粒＋ローム微粒、炭化物粒微量含む
5 赤黄褐色土層　ローム微粒中に焼土粒多く含む



S I 01

1 黒褐色土層　ロームの微粒～径5㎜の粒少量含む（畑耕作土）
2 黒褐色土層　ロームの微粒～径5㎜の粒少量、暗褐色土粒斑状に少量含む
3 暗褐色土層　黒色土粒＋ローム微粒
4 明褐色土層　ローム微粒＋黒褐色土粒、径2㎝までのロームブロック少量含む
5 暗褐色土層　黒褐色土中にローム微粒多く含む、径2㎝までのロームブロック少量含む
炭化物粒微量含む
6 暗褐色土層　5層と同様だがローム粒やや多い、焼土粒微量含む
7 黒褐色土層　ローム微粒少量含むが下方と6層との境部分にやや多い
8 明褐色土層　ロームの微粒～径2㎝のブロック主体、暗褐色土粒少量含む（貼り床構成土）



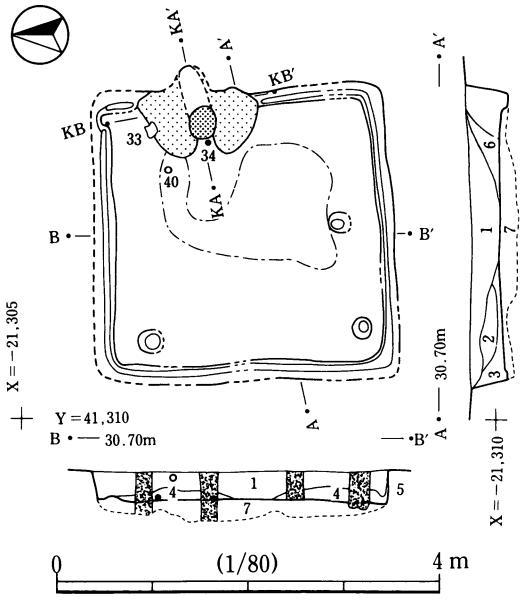


S I 02

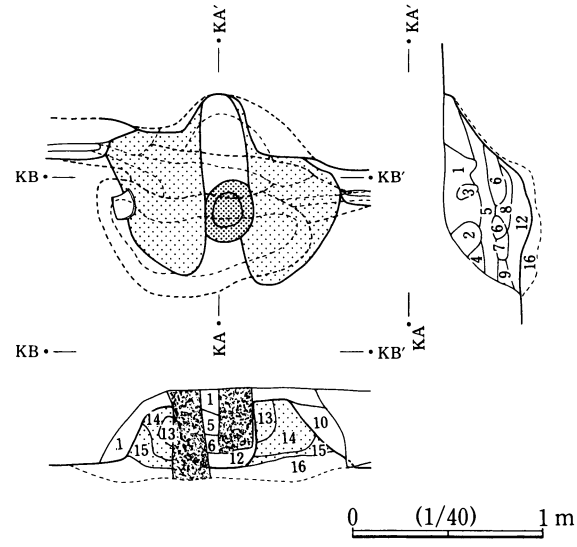
1 黒色土層　暗褐色土粒斑状に少量含む
2 黒褐色土層　暗褐色土粒斑状に多く含む
3 明～黄褐色土層　ローム微粒主体、黒色土粒少量含む
4 明褐色土層　暗褐色土粒＋ローム微小粒
5 暗褐色砂質粘土層　灰褐色砂質粘土＋黒色土粒
6 暗褐色砂質粘土層　5層と同様だがやや明るい
7 暗褐色土層　径1㎝のロームブロック・砂質粘土少量含む
8 明褐色土層　ロームの微粒～径2㎝のブロック主体、黒色土粒少量含む（貼り床構成土）

（カマド）
1 灰黄褐色砂質土層　砂質粘土＋黒褐色土粒
2 灰黄褐色砂質土層　1層と同様だが焼砂粒微量含む
3 赤黒褐色砂質土層　1層と同様だが焼砂粒少量含む
4 赤灰褐色砂質土層　砂質粘土＋暗褐色土粒、焼砂粒多く含む
5 灰黄褐色砂層　黒色土粒少量含む
6 赤灰褐色砂層　5層が被熱赤化した部分
7 暗褐色砂質土層　黒色土粒＋砂＋ローム微小粒（基礎構成土）

第4図　S K01、S I 01、S I 02



（ＳＩ３）
1　黒褐色土層　暗褐色土粒斑状に少量含む
2　明褐色土層　ローム微粒主体、径１cmのブロック・黒色土粒少量含む
3　明褐色土層　２層と同様だがややローム粒多い
4　黒褐色土層　１層と同様だがややローム粒多い
5　明褐色土層　ロームの微小粒主体、黒褐色土粒少量含む
6　黒褐色土層　ロームの微小粒・砂質粘土少量含む
7　黒褐色土～明褐色土層　ロームの微粒～径３cmのブロック＋黒色土層（貼り床構成土）



（カマド）
1　黒褐色砂質土層　黒褐色土中に黄褐色砂質粘土多く、ロームの微粒～径５mmのブロック少量含む
2　黄褐色砂質土層　黒褐色土粒少量含む
3　黄褐色砂質土層　焼砂粒少量含む
4　黒褐色砂質土層　黒褐色土中に砂質粘土少量含む
5　黒褐色土層　４層と同様だがやや黒い
6　赤橙色砂層　砂質粘土の被熱赤化した径３cmのブロック含む
7　赤黒褐色砂質土層　被熱赤化した砂質粘土中に黒褐色土粒少量含む
8　暗褐色砂質土層　砂質粘土＋黒褐色土粒
9　黒褐色砂質土層　５層と同様だが赤化砂粒やや多い
10　黄褐色砂質土層　ローム粒中に灰黄色砂のブロック少量含む、住居壁崩落土の混入
11　赤黄褐色砂質土層　砂質粘土に赤化砂質粘土・黒褐色土粒少量含む
12　暗褐色土層　焼土・焼砂粒少量含む（火床部の焼砂は掻き出されている）
13　赤黄褐色砂質土層　黄褐色砂質粘土が被熱赤化した部分
14　黄褐色砂質土層　黒色土粒少量含む
15　黒褐色砂質土層　黒色土中に砂質粘土・ローム粒少量含む
16　暗褐色土層　ロームの微粒～径２cmのブロック中に黒色土粒多く含む（基礎部分）

第５図　ＳＩ03

腐植土である黒色土層、ソフトローム層への漸移層と考えられる明褐色土層が存在し、南端部では風倒木痕が確認された。近年の盛土層中から埴輪片が多数検出されたが、それより下層からは全く出土せず、遺構の落込みも検出されなかった。現在の県立成田園芸高校校舎敷地部分にはかつて古墳群が存在していたが、第二次大戦直後に重機によって整地され、その際に石棺や多くの埴輪が出土したという話が伝わっており、この部分の盛土はその際のものであることが推測される。

なお、盛土以前の表土の標高は31m余であるが、これは東側の体育館の敷地、北側の校庭、さらに道路を挟んだ農園地区（Ｂ区を含む）の標高とほぼ一致していることから、校舎の建つ部分はほぼ全体に盛土部分であり、古墳のマウンドは削平されているが、周溝以下は存在しているものと考えられる。

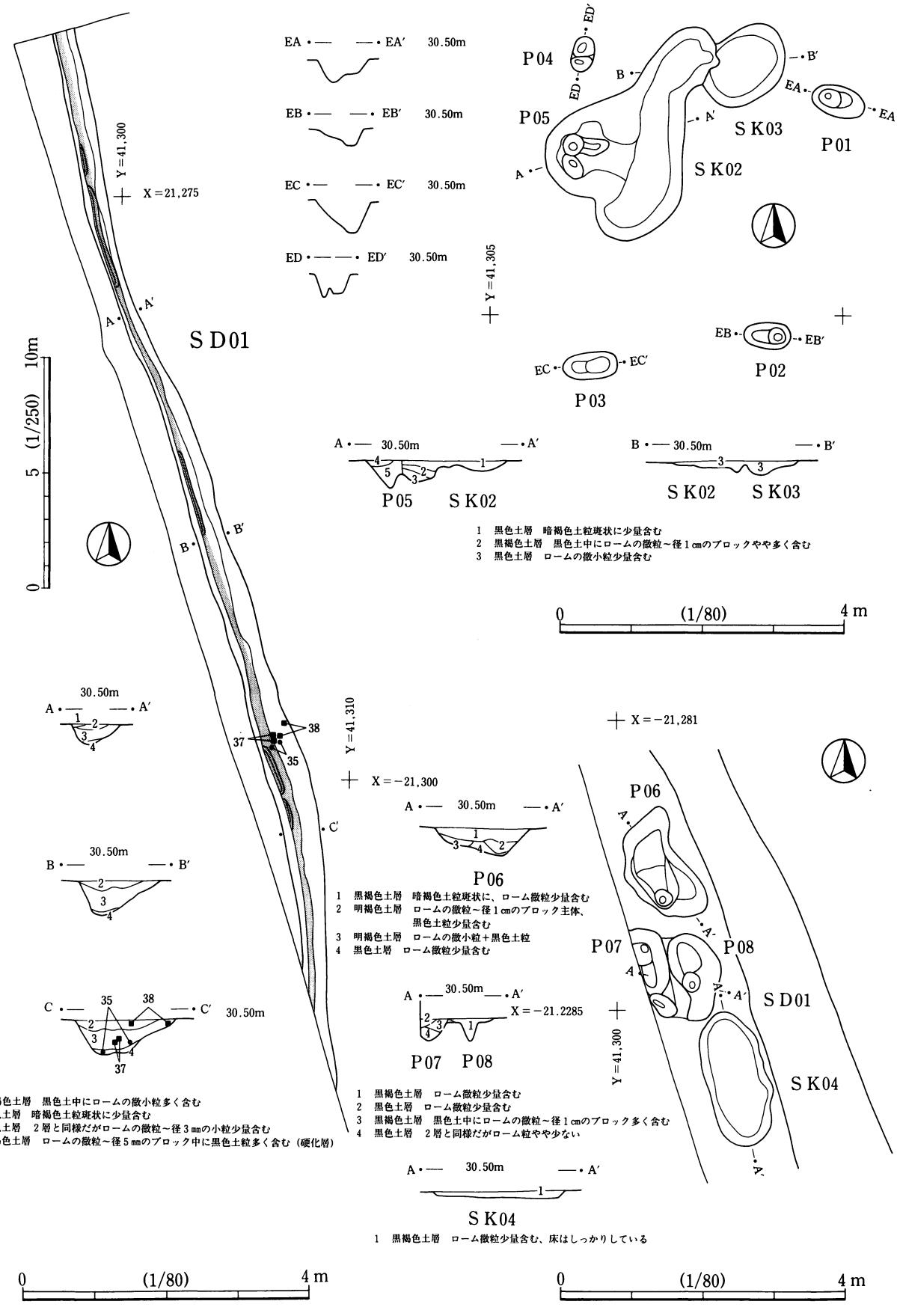
Ｂ区

ＳＫ01（第４図、図版２）

トレンチャーによってほとんどの部分が破壊されているが、直径70cm、長径60cm・短径40cm、直径20cm・深さ10cmほどの浅い穴が並んで３か所検出された。覆土は焼土を多く含み、壁はロームが被熱硬化していた。遺物の出土はなかったが、Ｂ区南部で縄文土器片が多く出土しているので、縄文時代の炉跡と推測される。

ＳＩ01（第４図、図版２）

Ｂ区東端部で検出された。東側の2/3ほどが調査区外である。主軸はN-20°-E、南北軸は3.4m以上、壁高は40cmを測る。壁溝をもつが、主柱穴も出入口施設も検出されなかった。カマドは北側辺に位置するものと推定される。極めて少量の土師器、須恵器片が出土したが、小片のため図示していない。住居形状や出土遺物から、８世紀代の竪穴住居跡と考えられる。



第6図　SD01、SK02・03、P01～P08

ＳＩ02（第４図、図版３）

主軸はN－３°-E、規模は長軸4.5m、短軸4.3mを測る。カマドは北辺の中央よりやや東寄りに位置する。主柱穴は４本で、台形状の配置となる。深さは50cm前後である。南側に南北方向に長い深さ20cmの浅い穴があり、底が南側に傾斜していることから、住居の南辺側に木製の階段状施設が存在したことが推測される。壁溝は北西と南西隅で一部途切れる。カマドは上部が崩壊している。袖部に砂質粘土を使用している。カマドの基礎（掘方）は、全体に浅く掘り下げたものである。北西壁に掛かって長径60cmほどのピット、右側袖下に深さ30cmの細い穴が確認されたが、性格は不明である。床面には顕著な硬化面は認められなかった。遺物はカマド周辺部から多量に出土した。それらから８世紀初頭の竪穴住居跡と考えられる。

ＳＩ03（第５図、図版４）

主軸はN-88°-W、規模は長軸3.2m、短軸3.1mを測る。カマドは東辺の北寄りに位置する。主柱穴は深さ10cmほどの浅いピットが西側に２か所検出された。南側には浅いピットが１か所あり、床の硬化面がそこからカマド手前まで存在することから、このピットは出入り口施設と考えられる。壁溝は全周する。カマドは袖部分が砂質粘土で造られ、天井部が崩壊している。基礎（掘方）は床部分に浅い窪みが掘られている。遺物はカマド付近から多く出土した。時期は、住居の形状や遺物から８世紀初頭と考えられる。

ＳＤ01（第６・７図、図版５）

Ｂ区西側で検出された幅0.6m～1.9m、深さ0.3m～0.4mの溝である。主軸はN-17°-Wで、現道路にほぼ平行する。覆土は竪穴住居跡の中上層と同様の黒色土が堆積し、底部には５cm～10cmの幅で硬化層が認められた。この硬化面の存在から、この溝は道路としても機能したことが推測される。遺物は縄文土器のほか、下層から８世紀初頭の土師器、須恵器が出土した。なお、常滑大甕の破片は確認面で出土したものである。覆土や遺物から、竪穴住居跡と同時期に存在した可能性も考えられる。

Ｐ01～Ｐ04（第６図、図版５）

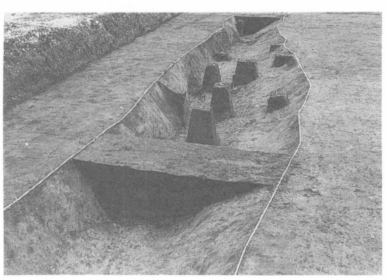
Ｂ区北西部にはピットや土坑が集中する地区が存在する。Ｐ01～Ｐ04は上端の長径70cmほど、短径40cmほどで、片側に直径20cmほどの中段、直径10cmほどの下端を有する。深さは30cm～40cmである。覆土は黒褐色土である。本来の柱穴は中段以下で、上端の長楕円形は柱を引き抜いた際の掘込みと考えられる。

Ｐ05～Ｐ08（第６図、図版５）

ＳＤ01の西側のピット群である。これらの上端は長軸1.4mと大きく、当初はその大きさから土坑と推測していたが、下部でＰ01～Ｐ05同様のピットが検出されたために、柱引抜きの際に伴って上部が掘られたものと判断した。Ｐ01～Ｐ08は建物の柱としては明確には並ばない。その形状や不規則性は、中世の集落跡や城館跡で通常検出されるピット群と同様である。また、Ｐ08覆土上層から常滑こね鉢片が出土した（第９図、図版６）ことから、中世遺構と考えられる。

ＳＫ02～ＳＫ04（第６図、図版５）

いずれも深さ５cm～10cmの浅い穴であり、土坑墓でもなく、その性格は不明である。しかし、中世と考えられる柱穴群と近接しており、これらとの関係があったものと推測される。



第７図　ＳＤ01遺物出土状況

Ⅲ 出 土 遺 物

本遺跡出土遺物の破片数は次のとおりである。奈良時代以降は遺構別とした。

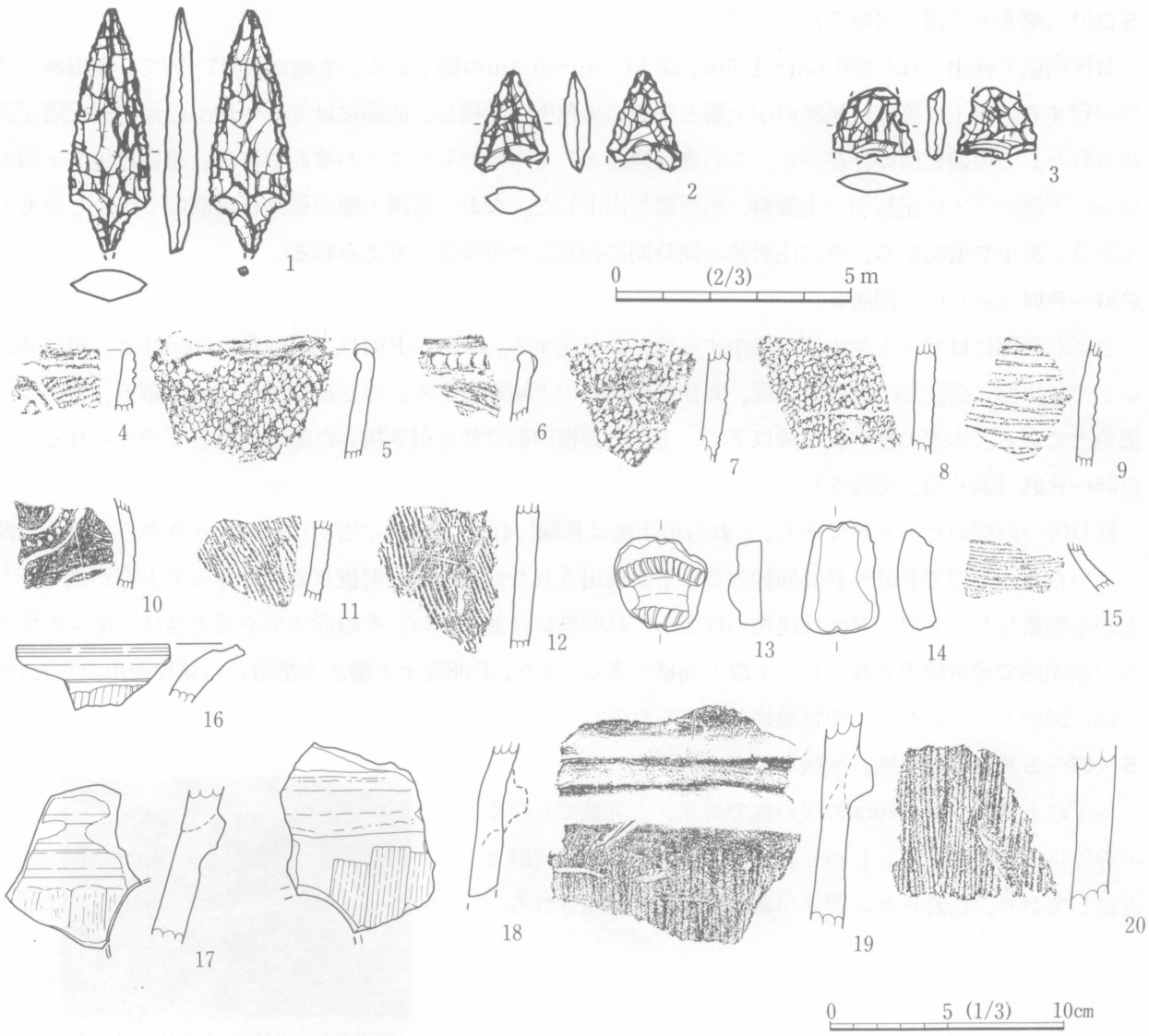
《縄文時代》チップ 3（黒曜石 2、チャート 1）、石器 3（有舌先頭器 1、石鏃 2） 早期土器 1、中期土器 13（阿玉台 3、他 10）、後期土器 55（堀之内 7、加曽利Ｂ 16、粗製土器 6、他 26）《弥生時代》後期土器 10 《古墳時代》埴輪 57、高坏 2《奈良時代～中世》＜ＳＩ01＞ 土師器坏 5、甕 4、須恵器坏 1、瓶 1 ＜ＳＩ02＞ 土師器坏 154、甕 383、須恵器坏 20、砥石 1、鉄製品 3（鉄鏃 1、鉄片 2） ＜ＳＩ03＞ 土師器坏 73、甕 25、須恵器坏 15 ＜ＳＤ01＞ 土師器坏 132、甕 220、須恵器坏 15、カワラケ 3、常滑大甕 1 ＜Ｐ08＞ 常滑こね鉢 1 ＜Ｂ区一括＞ 土師器坏 20、甕 56 須恵器坏 6

次に時期別に記述することとする。

1 縄文時代・弥生時代（第８図、図版６）

石器 1は安山岩製の有舌尖頭器、2・3は黒曜石製石鏃である。いずれもＢ区一括資料である。

土器 4～10は縄文時代後期、11・12は晩期、13・14は中期の土器片錘、15は弥生後期である。

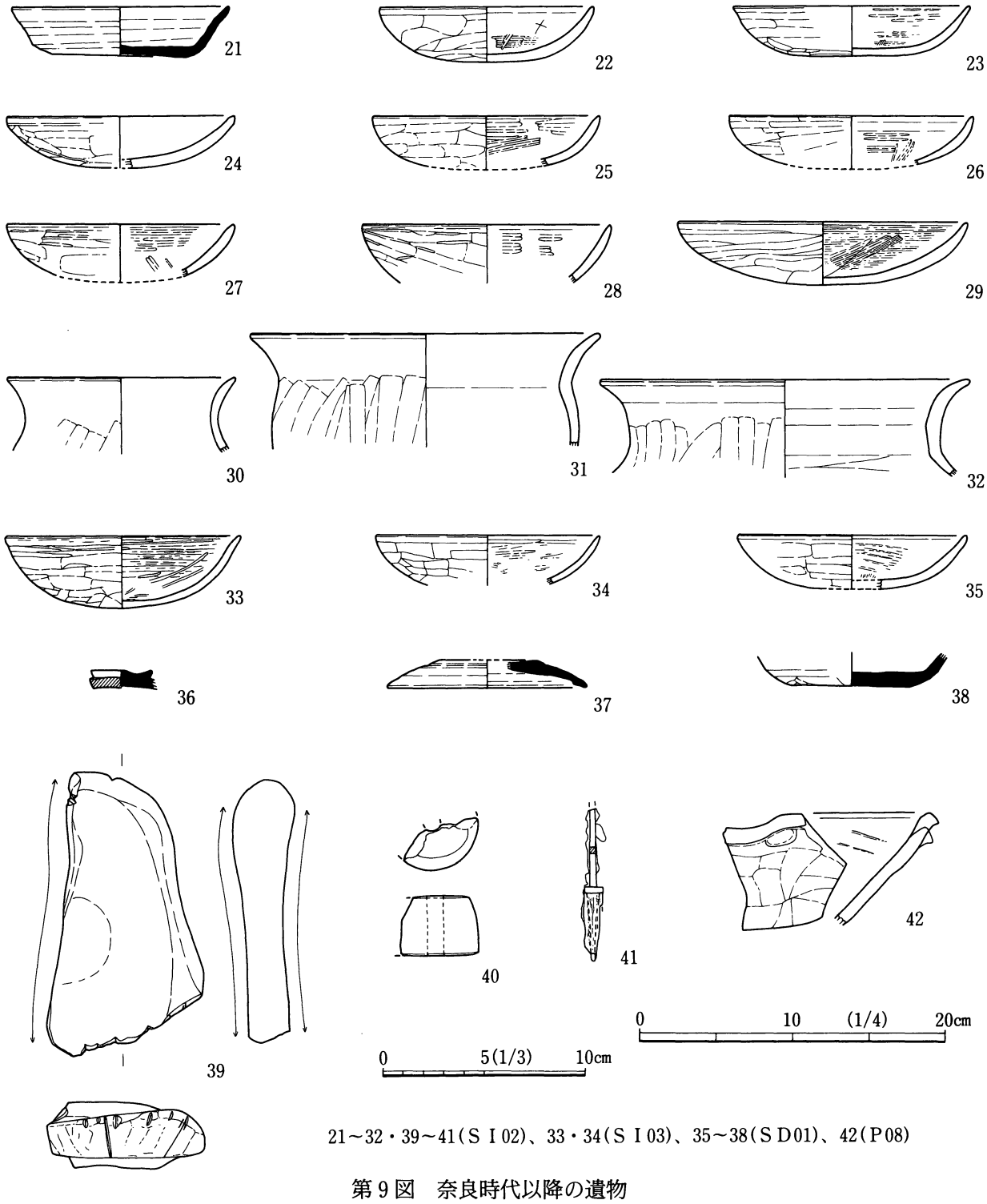


第８図 古墳時代以前の遺物

4は縄文が沈線によって区画される口縁部で、堀之内式に比定される。5は縄文、6は半截竹管と条痕の口縁部、7・8は縄文、9は竹管による太沈線、10は磨きと沈線による注口土器で、これらは加曽利B式に比定される。11・12は深い撚糸文で、晩期に比定される。13は阿玉台式、14は中期土器の胴部から底部にかけての破片を再利用したものと考えられる。15は弥生時代後期の壷の肩部である。

2　古墳時代（第9図、図版6）

埴輪　16は朝顔形埴輪の口縁部、17・18は円筒埴輪の透穴が一部残る部分であるが、突帯部分は欠損している。19は突帯部分が良好に残存するものである。突帯の形状から推測される年代は6世紀前半である。



21～32・39～41(SI02)、33・34(SI03)、35～38(SD01)、42(P08)

第9図　奈良時代以降の遺物

3　奈良時代（第９図、第２表、図版６）

21～32・39～41はＳＫ02出土、33・34はＳＫ03出土、35～38はＳＤ01出土である。

須恵器・土師器(21～38)　内容は第２表の奈良時代土器観察表に示す。８世紀初頭の所産と考えられる一群である。

第２表　奈良時代土器観察表

挿図番号	遺構	種別	器種	遺存	口径	底経	器高	色調	胎土	外面調整	内面調整	備考
21	ＳＩ02	須恵器	坏	3/4	14.2	8.8	3.1	灰黄褐色	石英・長石微量 雲母片やや多量			
22	ＳＩ02	土師器	坏	3/4	14.0	6.3	3.5	橙色	石英・長石・ 黒色微粒やや多量	ヘラ削り	ヘラ磨き	内面に十字の線刻
23	ＳＩ02	土師器	坏	2/5	15.5	7.8	3.0	橙色～にぶい褐色	長石・石英粒やや多	ヘラ削り	ヘラ磨き	
24	ＳＩ02	土師器	坏	1/4	14.9		3.4	橙色	石英・長石・黒色 微粒普通量	ヘラ削り	ヘラ磨き	
25	ＳＩ02	土師器	坏	1/6	14.8			(外)にぶい橙色 ～橙色　(内)橙色	石英・長石・黒色 微粒少量	ヘラ削り	ヘラ磨き	
26	ＳＩ02	土師器	坏	1/10	15.9		(3.5)	(外)にぶい橙色 (内)橙色	石英・長石・黒色 微粒少量	ヘラ削り	ヘラ磨き	
27	ＳＩ02	土師器	坏	1/8	14.8		(3.7)	(外)橙色～にぶい 赤褐色　(内)橙色	石英・長石・黒色 微粒少量	ヘラ削り	ヘラ磨き	
28	ＳＩ02	土師器	坏	1/8	16.2			橙色	石英・長石・黒色 微粒少量	ヘラ削り	ヘラ磨き	
29	ＳＩ02	土師器	盤	1/1	18.8		4.0	浅黄橙色～明黄褐色	石英・長石少量 黒色微粒やや多量	ヘラ削り	ヘラ磨き	内面全体に十字の線刻
30	ＳＩ02	土師器	甕	口辺 1/4	(14.6)			橙色	石英・長石・黒色 微粒普通量、 白色針状物質微量	ヘラ削り 口辺部は 横ナデ	ヘラ削り 後横ナデ	
31	ＳＩ02	土師器	甕	口辺 1/4	(22.6)			橙色	石英・長石・ 黒色微粒普通量 白色針状物質微量	ヘラ削り 口辺部は 横ナデ	ヘラ削り 後横ナデ	
32	ＳＩ02	土師器	甕	口辺 1/2	(24.0)			橙色	石英・長石・ 黒色微粒普通量	ヘラ削り 口辺部は 横ナデ	ヘラ削り 口辺部は 横ナデ	
33	ＳＩ03	土師器	坏	3/4	15.5		4.7	(外)にぶい橙色 (内)明褐色	石英・長石・黒色 微粒少量 白色針状物質少量	ヘラ削り	ヘラ磨き	
34	ＳＩ03	土師器	坏	1/10	(14.8)			橙色	石英・長石・ 黒色微粒普通量	ヘラ削り	ヘラ磨き	
35	ＳＤ01	土師器	坏	1/3	(14.9)		(3.5)	橙色	石英・長石・ 黒色微粒普通量	ヘラ削り	ヘラ磨き	
36	ＳＤ01	須恵器	坏蓋					黄灰色	石英・長石多量			
37	ＳＤ01	須恵器	坏蓋	1/5	13.0		6.4	黄灰色	石英・長石多量 雲母片多量			
38	ＳＤ01	須恵器	坏	1/3	7.6			黄灰色	石英・長石多量 粒子大	ヘラ削り	ナデ	

砥石(39)　砂岩製。長軸13.7cm、短軸7.3cm、最大厚3.1cmを測る。使用面は３面であるが、刃部を立てたまま研いだ痕跡が12か所存在する。

土製紡錘車(40)　上径3.6cm、下径4.5cm、高さ3.9cmを測る。ほぼ半分が欠損している。

鉄鏃(41)　鏃先端部と茎先端部は欠損している。茎には木質が残存している。床面で検出された。

４　中世（第９図、図版６）

常滑片口鉢(42)　Ｐ08出土である。注口部分が一部残る口縁部から胴部にかけての破片である。胎土は径３㎜までの長石・石英・灰色石粒を多く含み、内外面明赤褐色である。口縁部平坦面の張出しは顕著ではなく、15世紀前半の所産と考えられる。[1)]

注

1　中野晴久　1994「赤羽・中野「生産地における編年について」」『中世常滑焼をおって　資料集』を時期判定の参考資料とした。

Ⅳ　ま　と　め

縄文時代　早期・中期・後期・晩期の遺物が出土しているが、主体となるのは後期の加曽利Ｂ式である。成田安食線関連遺跡群でも後期が主体となる遺跡が多く、近接した下福田稲荷原遺跡、松崎播磨遺跡で加曽利Ｂ式が多く出土している。

弥生時代　成田安食線関連遺跡群では、弥生時代の遺構・遺物は検出されていないので注目される。

古墳時代　Ａ区から出土した埴輪の時期は６世紀前半と考えられ、成田園芸高校の西側に展開する上福田古墳群の一部が校舎敷地内に存在したことが推測される。

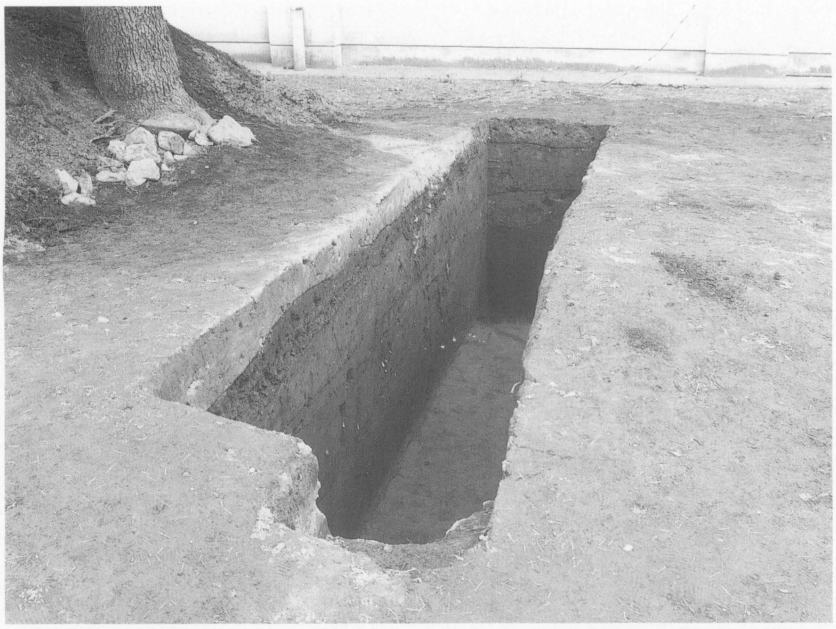
奈良時代　竪穴住居跡や溝の時期は、その出土遺物から８世紀初頭に比定される。同一台地上の東側に位置する松崎播磨遺跡で当該期の竪穴住居跡が１軒、烏内遺跡でも１軒検出されており、関連が考えられる。また、集落と同一時期と推定される溝は、道路としても使用された痕跡があること、現道と平行することなどから、何らかの区画としての意味も考えられる。

中世　成田安食線関連遺跡群の上福田和田谷津遺跡、上福田保町遺跡、下福田稲荷原遺跡は、現在の上福田集落の北から東側縁辺部に当たる。台地整形区画が検出された烏内遺跡は、現在の松崎の集落の東側縁辺部に当たる。これらの遺構は集落本体の跡ではなく、墓域や耕地跡と考えられる。本遺跡は松崎の集落の北側の縁辺部に該当する。こうしたことから、本遺跡の中世遺構が中世松崎集落（郷）に関係した可能性も考えられる。

写　真　図　版

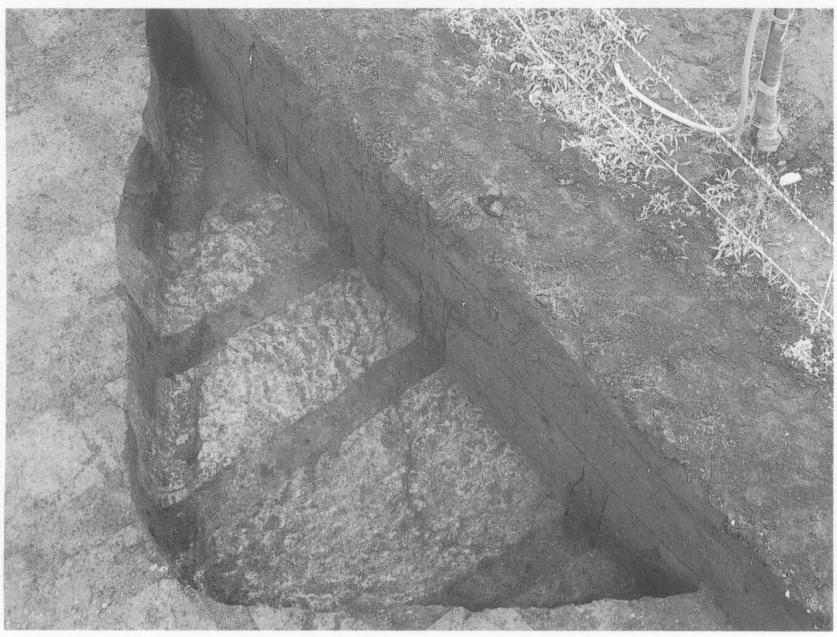
(1) 航空写真

(2) B区全景

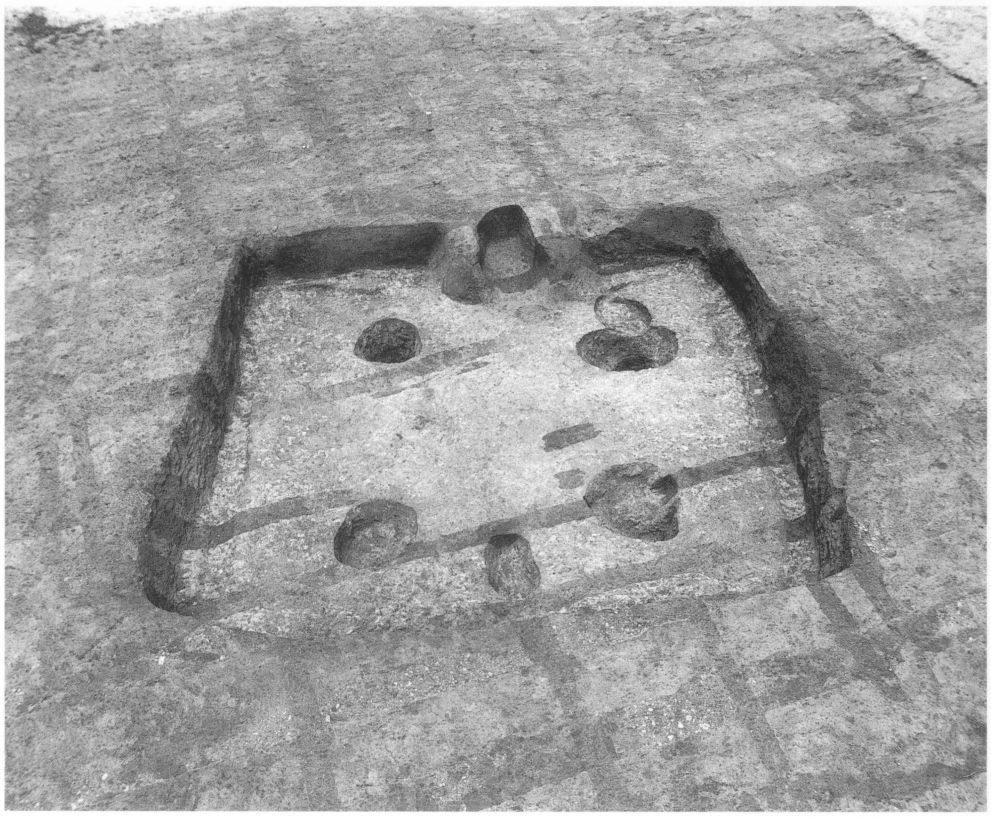


(1) A区トレンチ

(2) S K01

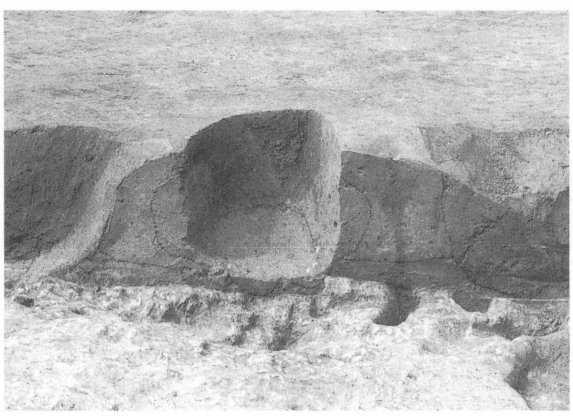


(3) S I 01全景

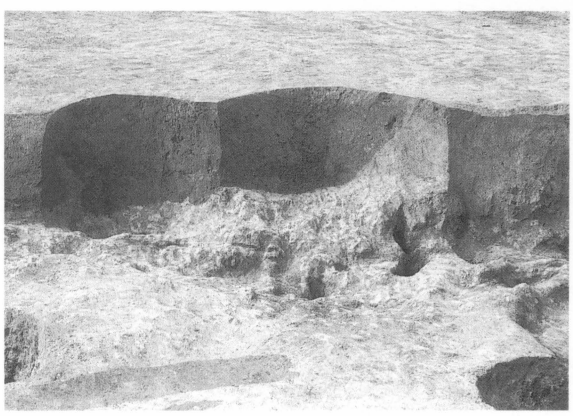


(1)全景

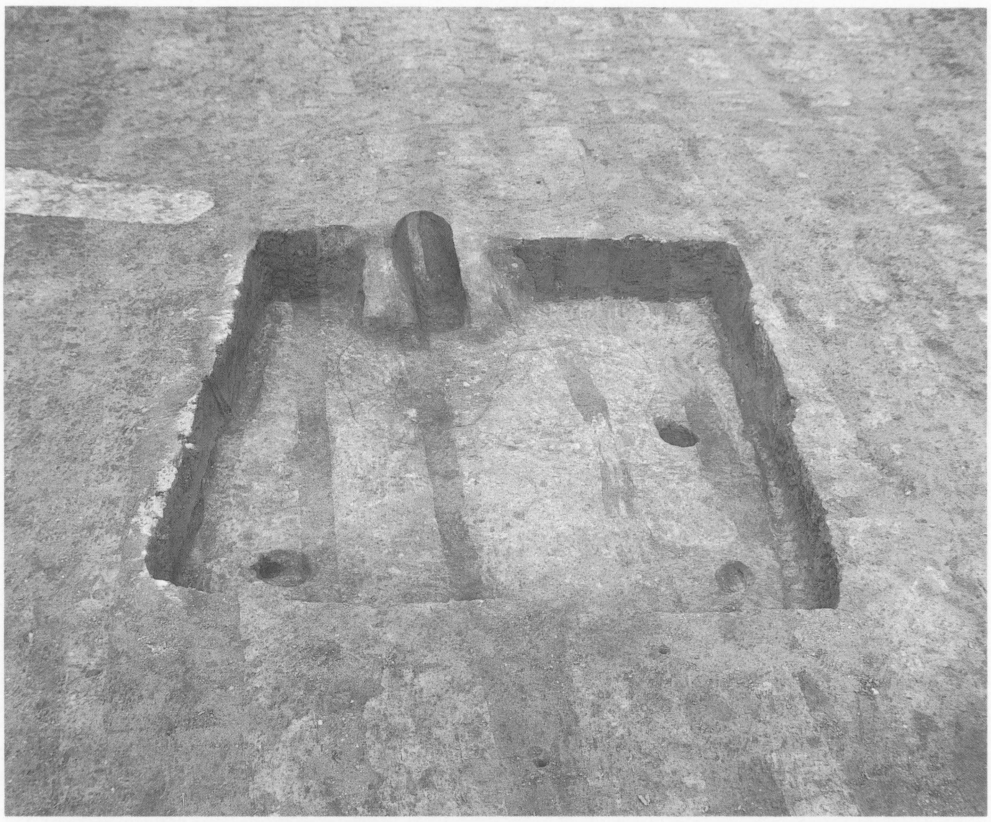
(2)遺物出土状況



(3)カマド半截状況

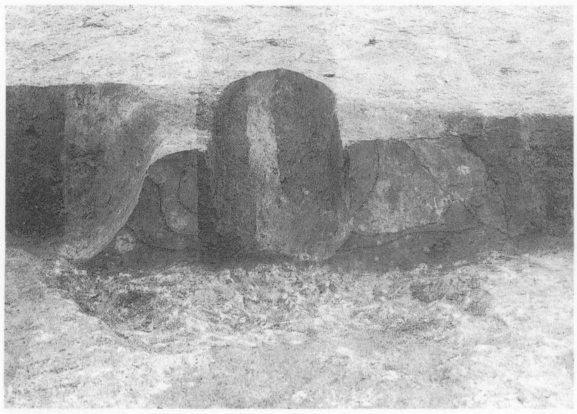


(4)カマド掘方

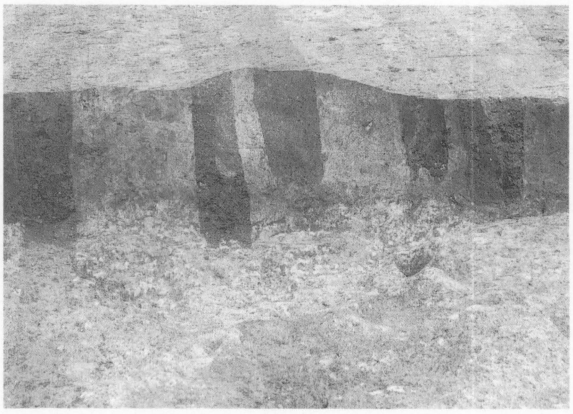


(1)全景

(2)遺物出土状況

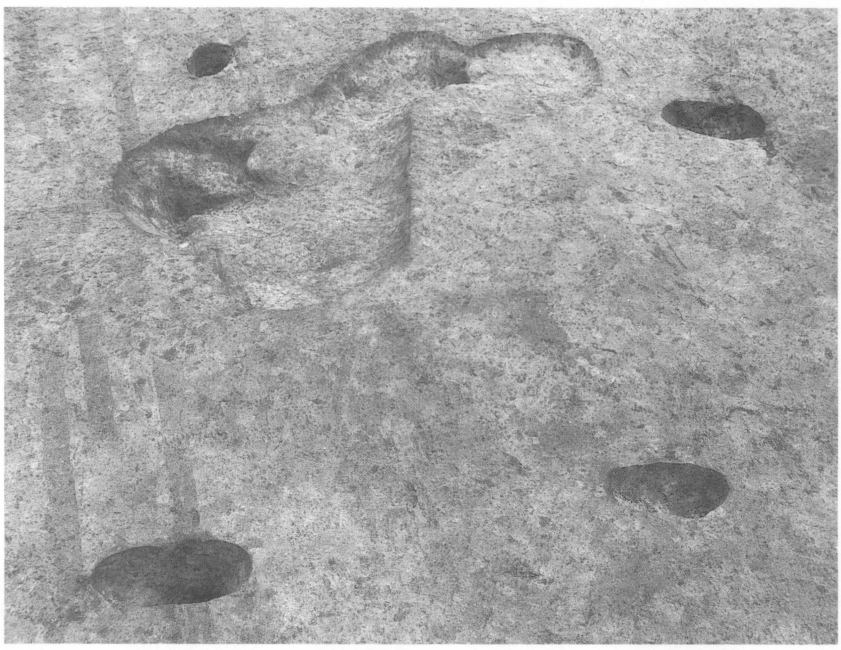


(3)カマド半截状況



(4)カマド掘方

(1) ＳＤ01全景

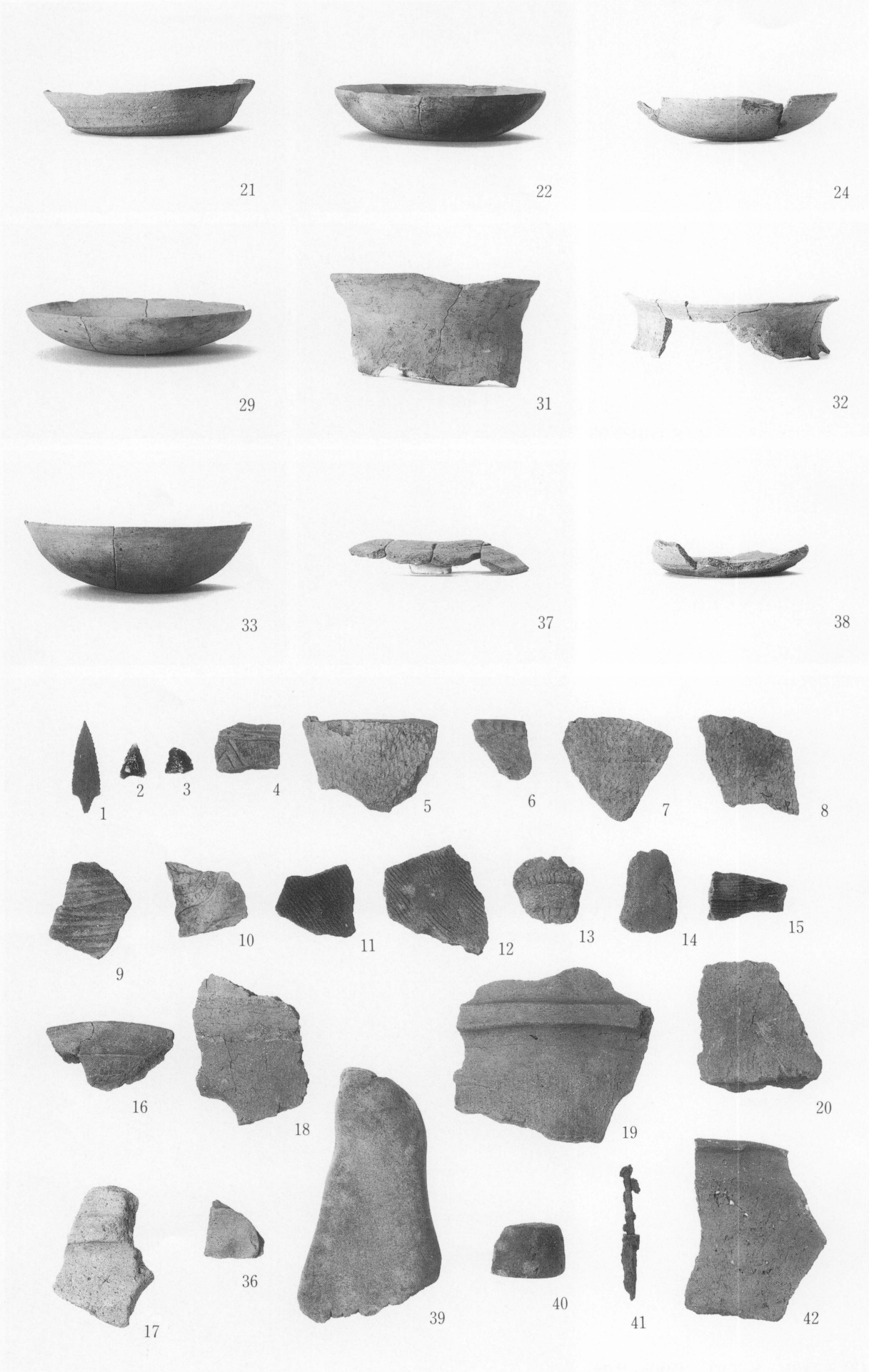


ＳＫ02・03、Ｐ01～Ｐ04

(3) ＳＤ01、ＳＫ04、Ｐ06～Ｐ08

図版 6

—出土遺物—


21
22
24
29
31
32
33
37
38
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
18
19
20
17
36
39
40
41
42

報告書抄録

ふりがな	なりたしまんざきとうばらいせき
書　　名	成田市松崎遠原遺跡
副 書 名	千葉県立成田園芸高等学校情報科学科棟埋蔵文化財調査報告書
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第 282 集
編著者名	井上哲朗
編集機関	財団法人千葉県文化財センター
所 在 地	〒284　千葉県四街道市鹿渡809番地2　　TEL 043-422-8811
発行年月日	西暦　1996年1月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 町村	コード 遺跡番号	北 緯 ° ′ ″	東 経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
松崎遠原（まんざきとうばら）	千葉県成田市（ちばけんなりたし） 松崎字遠原（まんざきあざとうばら）	12211	060	35度 48分 30秒	140度 17分 20秒	19950601～ 19950630	1,044	建物建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松崎遠原		縄　文	炉跡	土器・石器	加曽利B式主体。
		古　墳		土師器・埴輪	6世紀前半に推定される。
	集落	奈　良	竪穴住居跡・溝	土師器・須恵器・土錘 鉄鏃・砥石	8世紀初頭に推定される。
		中　世	土坑・ピット	常滑	15世紀前半に推定される。

千葉県文化財センター調査報告　第282集

成田市松崎遠原遺跡

千葉県立成田園芸高等学校情報科学科棟埋蔵文化財調査報告書

平成８年１月31日発行

編　集　財団法人　千葉県文化財センター

発　行　千葉県教育委員会

千葉市中央区中央4-13-28

財団法人　千葉県文化財センター

四街道市鹿渡809-2

印　刷　株式会社　エリート印刷

千葉市中央区市場町6-8